

それぞれの時代を描く 2冊の本

桜友会会長
内藤 頼誼

野球をテーマに、それぞれの時代を描いて感動を誘う2冊の本が昨年出版された。

「神宮の奇跡」(門田隆将著、講談社)と「バンクーバー朝日軍」(テッド・Y・フルモト著、文芸社)である。

前者は昭和33年秋の東都大学野球1部リーグで、学習院が中大、日大と3度にわたる優勝決定戦の挙句、初の優勝を勝ち取るまでのチーム一丸となった闘いぶりを生き生きと描き出す。神宮球場で熱心に応援された皇太子殿下(当時)のご婚約が発表されたのは優勝決定の3日後であり、この年にはまた、「ミスター・プロ野球」となる長嶋茂雄選手がデビュー、東京タワーも完成した。筆者の門田氏は33年こそ、日本が爆発的な高度成長に向かう「起爆」の年だったとみている。



当時の東都大学1部は現在以上にプロ野球選手を輩出し、とりわけ中大、日大に専大を加えた「御三家」は優勝争いの常連だった。「合宿所も専用バスもない」学習院野球部が強豪校を破ったのは「自分に与えられた条件の中で粛々と努力」を続けたからであり、それこそが高度経済成長をもたらす中で「日本人ひとりひとりが成し遂げたこと」だと著者は指摘する。

優勝50周年の節目にこの本が出版されたことは実に喜ばしい。高等科で硬式野球部に所属し、優勝した田辺隆二主将(現大学野球部監督)や1部昇格に貢献した草刈廣さん(桜友会前副会長)らと一緒にプレーしたことのある私は、読みながら懐旧の思いを深めもした。野球に限らず学習院の伝統、皇室とのゆかりの深さについてあらためて考えるきっかけともなる本である。

「バンクーバー朝日軍」は、1914年に日系2世の少年を集めて結成されたチームが、カナダで反日・排日の気運が高まるなか、地道な練習を積み重ねて、堅い守備と独特のバント戦法を磨き上げ、26年に白人の強豪チームをなぎ倒してアマチュア・リーグを制覇するドキュメントだ。41年、彼らの祖国日本は米英との戦争に突入、カナダ政府の戦時特別措置によってバンクーバーの日系人はすべて強制移住の対象となり、朝日軍の歴史は幕を閉じる。この不当な措置への補償が行われたのは、80年代になってからだが、2003年には朝日軍のカナダ野球殿堂入りが実現、

特別寄稿

チームの栄光がようやく歴史に刻まれた。

この本を書いたフルモトさんは、朝日軍のエース、打者としても活躍したテディ・フルモトの子息・古本喜庸さん（昭47大法）で、父上の語る朝日軍の活躍ぶりが心に焼きついていた。直接の執筆の動機は、トロントで会った朝日軍OBに「日本ではわれわれのことを知っているんだろうね」と尋ねられ、ほとんどの人が知らないと答えざるを得なかったことだという。確かに私たちは「現在」にばかり目を奪われて、歴史を知らな過ぎるのではなかろうか。

朝日軍の草創期に本場の大リーグで活躍したベーブ・ルースやルー・ゲーリッグを米国の野球ファンなら誰でも知っているが、同時代にデビューした澤村栄治、スタルヒンを日本の“プロ野球ファン”はどれだけ知っているだろうか。歴史を知ってこそ、現在の事象が味わい深く、自らの視点も定まってくることを、この本から学びたい。